

第 2 章

第 2 章：ドゥッラーニー帝国の台頭

アフマド・シャー・ドゥッラーニー：建国の王

16 世紀から 17 世紀にかけて、現在のアフガニスタンを含む地域は、インドのムガル帝国とペルシアのサファヴィー朝との間で争われる最前線となった。両帝国が勢力拡大を図るなかで、この戦略的に重要な地域の支配権は、時代とともにたびたび変動した。

これらの地政学的抗争の中心には、両帝国の間に広がる山岳地帯に居住していたパシュトゥーン諸部族がいた。彼らはその戦略的な位置と戦闘的な気質ゆえに、継続する紛争における重要な存在となった。外部勢力による支配に抵抗し、この地域を通過する重要な交易路や峠の支配をめぐる争いにおいて、決定的な役割を果たしたのである。

パシュトゥーン諸部族は、これらの峠を支配することによって交易品や軍隊の移動を左右できたため、しばしばこの地域の治安を不安定にした。その影響力は、地域における勢力均衡を大きく左右する要因となっていた。

ムガル帝国とサファヴィー朝の抗争が続くなか、アフガニスタン史における新たな章が幕を開けようとしていた。パシュトゥーン諸部族の間で絶えず変動する勢力関係と、周辺帝国からの外的圧力が重なり合い、統一の原動力が生まれる土壌が形成されたのである。やがてこの力はアフマド・シャー・ドゥッラーニーの指導のもとに結集し、ドゥッラーニー帝国を樹立するに至った。それは後の近代アフガニスタン建国の礎となる歴史的転換点であった。

ムガル帝国とサファヴィー朝の対立

西暦 1649 年、ペルシアのシャー・アッバース 2 世はカンダハールの攻略に成功し、現在のアフガニスタン南部におけるムガル帝国の影響力を大きく低下させた。この出来事は、戦略的に重要な領土の支配をめぐる争われたサファヴィー朝とムガル帝国の継続的な抗

争の一環であった。同時期、パシュトゥーン系のアブダリー族とギルザイ族は、ザミンダワール、タルナック、アルガンダーブ溪谷といった肥沃な土地に定住を始めた。これらの移住は、部族の移動様式の変化と、この地域における地政学的構造の進化を象徴するものであった。

ムガル帝国の侵攻は、この地域におけるタジク人の支配を弱体化させ、彼らの要塞都市を破壊するなど深刻な影響を及ぼした。この時期には、そして今日のアフガニスタンの権力政治においても、タジク人、ウズベク人、ハザーラ人、パシュトゥーン人という四大民族が、それぞれ複雑に絡み合う形で勢力構造に関与していたことがわかる。テュルク系およびモンゴル系の血を引くハザーラ人は、さまざまな同盟や紛争に関与し、ときにはパシュトゥーンのアブダリー族やギルザイ族を支援することもあった。アブダリー族とギルザイ族という2大パシュトゥーン部族は、サファヴィー朝とムガル帝国という2大勢力の対立を巧みに利用しながら、自立と影響力拡大を目指して戦略的に動いていた。

18世紀初頭、サファヴィー朝のシャー・アッバースは、グルジアの王子グルギン・ハーンをカンダハール総督に任命した。しかしグルギン・ハーンは現地の慣習を無視し、贅沢な生活を送ったため、アフガン住民の不満が高まった。ギルザイ部族の長老で尊敬を集めていたミール・ワイス・ホータクは、グルギン・ハーンの行状についてたびたびサファヴィー朝のシャー・スルタン・ホセイーンに訴えたが、訴えは無視された。ついに西暦1709年、サファヴィー朝宮廷の無為に業を煮やしたミール・ワイス・ホータクは自ら行動を起こし、グルギン・ハーンを暗殺した。この出来事は地域史の転換点となり、ホータク朝の成立とカンダハールにおけるサファヴィー朝の影響力低下を告げるものとなった。

西アフガニスタンでは、ギルザイ族がパシュトゥーン封建社会の中核を形成し、社会・政治構造において重要な役割を果たしていた。一方、東部ではパシュトゥーン諸部族がムガル帝国に対してさまざまな程度の従属関係にあった。アブダリー族はヘラート地域に定住し、次第に台頭していった。

18世紀初頭、ミール・ワイス・ホータクの指導のもと、この地域のアフガン人たちはサファヴィー朝の支配からの独立を宣言し、ホータク朝を樹立した。新王朝は、部族間の内部抗争やペルシアへの勢力拡大の野望など、多くの課題に直面した。国家の政治的・経済的・軍事的基盤を強化することが、この統合と拡張の時期におけるアフガン指導者たちの最優先課題となった。サファヴィー朝の衰退は、アフガン軍やオスマン軍の侵攻によって加速し、ペルシア国家は分裂と不安定の時代に突入した。この混乱の中から、ナーディール・シャー・アフシャールが強力な軍事指導者として台頭し、アフガンのホータク朝からマシュハドを奪還した。

西暦 1729 年、ナーディル・シャー軍はダームガーン近郊でアフガン王アシュラフ・ホータクを決定的に打ち破り、ペルシアの権威回復における重要な一歩を刻んだ。ナーディル・シャーはアフガン諸部族間の分裂を巧みに利用し、ギルザイ族よりもアブダリー族を優遇してその忠誠を確保した。アブダリー軍団はナーディル・シャーの軍事遠征で中心的な役割を果たした。

アブダリー族とギルザイ族はパシュトゥーン社会の主要部族として、アフガニスタンの政治的力学において歴史的に大きな影響力を行使してきた。彼らの同盟と対立の網は、国家の政治的運命を形づくる上で重要な役割を果たした。現代アフガニスタン政治においても、アブダリー系のハーミド・カルザイ元大統領とギルザイ系のアシュラフ・ガニー元大統領の存在は、こうした部族的つながりと対立が今なお政治に影響を及ぼしていることを示している。

ナーディル・シャーの統治は、西暦 1747 年、将校の一派によって暗殺されることで暴力的に終わり、その帝国は崩壊した。その後、アフマド・シャー・ドゥッラーニーのもとでドゥッラーニー帝国が興隆した。

アフマド・シャー・ドゥッラーニーの即位

1747 年のナーディル・シャー暗殺後、アブダリー族を含むアフガン軍はカンダハールへ帰還した。のちにドゥッラーニーと称されるアフマド・シャー・アブダリーは、傑出したアフガンの軍司令官であり、ほどなくしてアフガン諸部族の指導者に選出された。

アフマド・シャー・ドゥッラーニーは新たに得た権威の勢いを迅速に活用した。彼のカリスマ的な指導力と卓越した軍事的手腕は、分裂していたパシュトゥーン諸部族を統一国家というひとつの理念のもとに結集させるうえで決定的だった。衰退するサファヴィー朝とムガル帝国が残した権力の空白を巧みに利用し、部族政治を乗り越え、戦略的同盟を築くことでその地位を確立した。1747 年のカンダハール制圧や 1761 年のマラーター軍とのパーニーバットの戦いでの勝利など、彼の軍事的成功は強力な指導者としての評判を不動のものとした。安定と繁栄を約束するその統治理念は部族間で広く支持を集め、ドゥッラーニー帝国建設の基礎を築いた。

彼の治世は約 25 年に及び、権力の統合と帝国領域の拡大に努めた。晩年には健康が悪化し、1772 年に死去したが、彼は近代アフガニスタンの建国者としての遺産を残した。

注目すべきは、アフマド・シャー・ドゥッラーニーが自らを「アフガニスタン王」ではなく「ホラーサーン王」と称していた点である。「アフガニスタン」という名称が一般的に用いられるようになったのは、19世紀に入ってからのことである。

ドゥッラーニー帝国の衰退は、内外の要因が重なって進行した。内部的には、パシュトゥーン諸部族間および王朝内部の抗争が続き、中央集権が弱体化して国家分裂を招いた。外部的には、イランにおけるカージャール朝の台頭や、パンジャーブにおけるランジート・シング率いるシク王国の出現が、帝国の領土的一体性を脅かした。さらに、ブハラ・ハン国がアムダリヤ川左岸への進出を試みたことも、北部支配を困難にした。これらの圧力が重なり、19世紀に入るとドゥッラーニー帝国は徐々に衰退していった。

ティームール・シャー・ドゥッラーニーの治世と課題

1772年にアフマド・シャー・ドゥッラーニーが死去すると、1773年にその子ティームール・シャー・ドゥッラーニーが王位を継承した。彼は部族間の敵対に直面し、帝国の統治をより円滑に行うために首都をカンダハールからカーブルへ戦略的に移した。この決定は、帝国支配の強化と安全保障上の課題への対応という戦略的観点から下されたものであった。

アフマド・シャー・ドゥッラーニーが息子ティームールを後継者に指名したことは、部族長たちの一部に不満を引き起こした。彼らは、自分たちへの事前の相談が一切行われなかったと訴えたのである。

ティームール・シャーの治世中、彼は軍事遠征や侵入を通じてインドにおける影響力を再び確立しようと試みたが、パンジャーブ地方のシク王たちや拡大しつつあったイギリス植民勢力の強い抵抗に遭遇した。父アフマド・シャーとは異なり、ティームール・シャーは穏やかな性格であり、忠誠心や行政の効率性の問題など、統治上の困難に直面した。

ティームール・シャー・ドゥッラーニーは、非パシュトゥーン系の官僚を国家行政の要職に任命し、主に彼らを通じて国政を運営する統治方針を採用した。また、経済の安定を重視し、税制改革を実施して徴税制度をより体系的かつ公平なものに整備した。さらに、宮廷支出の削減によって財政の均衡を図りつつ、官僚・職員・兵士の給与を引き上げることで忠誠を維持し、行政機構の円滑な運営を確保しようとした。

しかしティームール・シャーの治世下で、ドゥッラーニー帝国は内部抗争、経済難、外部からの脅威などによって著しい衰退に陥った。その安定を確保するための有効な対策は講

じられなかった。加えて、ティームール・シャーには複数の妻から 23 人の息子がいたことが事態をさらに複雑にした。

このため、死後には後継者争いが激化し、王族間の内紛が勃発、帝国の崩壊を一層加速させる結果となった。ティームール・シャー・ドゥッラーニーの死後、息子たちおよびドゥッラーニー族長老たちの間で発生した内戦は、帝国の結束を著しく弱体化させた。この内乱の時期に、イギリス植民勢力はこの地域での影響拡大を目指して介入を強めた。こうした過程のなかでドゥッラーニー帝国は次第に衰退し、19 世紀初頭には地方支配者の台頭とバラクザイ朝の成立への道が開かれた。したがって、ティームール・シャー・ドゥッラーニーの治世は、内外の困難に満ちたものとして 1793 年の彼の死によって幕を閉じた。

アメリカの学者アーノルド・フレッチャーは、アフマド・シャー・ドゥッラーニーの評価について、建国者としての偉業とその後の帝国衰退の対比を強調している。彼はアフマド・シャーを、アジア史における卓越したが十分に認知されていない人物として描き、その軍事的天才と国家建設の業績を称える一方で、後継者たちの失敗によってその名声が損なわれ、彼が築いた栄光を帝国が維持できなかったと述べている。

ザマーン・シャー・ドゥッラーニーの治世と外的脅威

ティームール・シャー・ドゥッラーニーの第 6 子であり、カーブル総督であったザマーン・シャー・ドゥッラーニーは、後継争いのさなかに王位に就いた。彼は父と同様、非パシュトゥーン系の民族集団からの軍事的支援に依存した。在位中、ザマーン・シャーはインドへの遠征を幾度か行い、ドゥッラーニー帝国の影響力を回復しようと試みたが、パンジャーブ進出の試みはことごとく阻まれた。

イギリスは、ザマーン・シャー・ドゥッラーニーとマイソールのティプー・スルターンとの間に同盟が結ばれ、インド亜大陸における自国の支配が脅かされる可能性を警戒していた。この懸念は、ティプー・スルターンがナポレオン・ボナパルトと交渉を進め、対英戦でのフランス支援を模索していたことによってさらに強まった。こうした地政学的緊張の中で、イギリスはペルシアを含む地域で外交活動を展開し、自国の利害への潜在的脅威に対抗しようとした。

やがてカーブルでの政治情勢はザマーン・シャーに不利となり、彼は王位を追われペシャワールに逃れた。この政変の混乱のなかで、彼はバラクザイ族の有力首長パイエンダ・ハーンの息子たちによって失明させられたと伝えられている。

1801 年、ザマーン・シャーの異母弟マフムード王子が、モハンマドザイ氏族のバラクザイ族長たちの支持を得て王位に就いた。マフムード王子がモハンマドザイ兄弟を政府の要職に任命したことにより、バラクザイ朝はアフガン政治において台頭を遂げ、19 世紀のアフガニスタンの特徴づける部族間抗争と王朝闘争の時代が幕を開けた。

1801 年 12 月、ドゥッラーニー王家の一員であるシャー・シュジャーは、1000 名の兵を率いてペシャーワルから出陣し、王位奪取を試みた。しかし抵抗に遭い、敗れてペシャーワルへ退却した。

その後 1803 年、シャー・シュジャーはついに王位に就くことに成功したが、その治世は困難に満ちていた。当時のアフガニスタンは内紛と外敵の脅威によって深刻な不安定状態にあり、シャー・シュジャーは有効な統治と秩序の維持に失敗した。その結果、ドゥッラーニー帝国の分裂はさらに進行した。

この時期、イギリス植民当局はアフガニスタンへの影響力拡大を目指していた。シャー・シュジャーはイギリスとの外交関係を樹立し、1809 年に「友好条約」を締結した。しかしこの条約は屈辱的なものと見なされ、アフガン国民の間で強い反発を招いた。それはアフガンの主権を損なうものと受け止められ、民衆の支持喪失と内部反対派の台頭を招いた結果、1809 年夏に彼は退位に追い込まれ、カーブルを脱出した。

この時期、モハンマドザイ兄弟たちは各地の州総督として大きな権限を握り、アフガニスタンでは権力の分散が進んだ。国は半独立的な封建行政単位に分裂し、ドゥッラーニー国家の中央集権体制は著しく弱体化した。ドゥッラーニー国家の行政・軍事組織は大幅に縮小し、モハンマドザイ兄弟間の内紛と抗争が王朝の崩壊を決定づけた。このようなアフガニスタン内部の分裂は、インドにおけるイギリス植民勢力の強化を間接的に助長し、地域全体をより分裂的かつ不安定な政治状況へと導いたのである。